

海へ

小川未明

青空文庫

この村でのわんぱく者といえ、だれ知らぬものがなかったほど、龍雄はわんぱく者でした。親のいうこともきかなければ、また他人のいうこともききませんでした。

よく友だちを泣かしました。すると泣かされた子供の親は、

「またあの龍雄めにいじめられてきたか。」

といつて、なかには怒つて親がわざわざ龍雄の家へ告げにやってくるものもありました。

こんなわけで龍雄の両親は、わが子にほとほと困つたのであります。学校にいる中

は、成績はいいほうでありましたけれど、やはり友だちをいじめたり、先生のいうこ

とをきかなかつたりして先生を困らしました。しかし小学校を卒業すると、家

がどちらかといえば貧しかったので、それ以上学校へやることができなかつたのであ

ります。龍雄は、毎日棒を持つて村の中をぶらぶら歩いていました。

彼は乱暴なかわりに、またあるときは、優しく、涙もろかつたのであります。だから、

この性質をよく知つている年をとつた人々には、またかわいがる人もあつたのであり

ます。

親は、もう十四になつたのだから、いつまでもこうしておくわけにはゆかぬと考えてい

ました。ちようどそのやさきへ、あるしんせつな老人ろうじんが、ありまして、そのおじいさんは、ふだん龍雄たつおをかわいがっていましたが、

「私の知しつた町まちの糸屋いとやで、小僧こそうが欲ほしいということだから、龍雄たつおをやつたらどうだ、先せん方はみなしんせつな人ひとたちばかりだ。なんなら私わたしから頼たのんであげよう。」

と、おじいさんはいいました。これを聞きいた龍雄たつおの親おやたちはたいそう喜よろこびました。そして、さつそく龍雄たつおをその家うちへやることに決きめました。

いよいよ家うちから出でて、他人たにんの中なかに入はいるのだと思おもうと、いくらわんぱく者ものでもかわいそうになつて、もう二、三日にちしか家うちにいないというので、両親りょうしんはいろいろごちそうをして龍雄たつおに食たべさせたりしました。ある日ひのこと、龍雄たつおは母親ははおやとおじいさんの二人ふたりに連れられて、町まちへいつてしまいました。

龍雄たつおが村むらにいなくなつたときくと、日ひごろ彼かれからいじめられていた子供こどもらは、みな喜よろこび安あん心しんしました。もうこわいものがないと思おもつたからです。

彼かれの母親ははおやや、また父親ちちおやは、

「いまごろはどうしてゐるだろう。」

と、龍雄たつおのことを思おもい暮くらしました。すると、いつてから二、三日にちたったある日ひの晩方ばんがた、

突然、戸口に龍雄の姿が現れたから、両親はびっくりして、そのそばに駆け寄りま
した。

「どうして帰ってきたか？」

と、母親は問いました。

母親は、なにか我が子が悪いことでもして出されてきたのではないかと思つたので、

こういう間も胸かどろきました。

「黙って帰ってきた。糸屋なんかいやだ。もうどうしてもゆかない。」

と、龍雄はいつてきませんでした。

「そんなことをいうもんでない。しんぼうしなくては人間になれない。謝って帰らなけ

ればならない。」

と、父親も、母親もいいましたけれども、どうしても龍雄はいうことをききませんでした

した。

母親の知らせによつて、しんせつなおじいさんがさつそくやってきました。

「いやなものしかたがない。さあ家へお上がり。先方は私からよくいつておく。また

私がよいところを捜してあげるから。」

と、おじいさんはいいました。

村の子供は、龍雄が家に帰ってきたことを知ると驚きおそれました。また龍雄が外に出ると子供を泣かしてくるので、彼の母親は心配し、気をもみました。

一日、しんせつなおじいさんが、龍雄の家へやってきました。

「いいところがあつた。四里ばかり離れた田舎だが、なに、汽車に乗ればすぐにゆけるところだ。大きな酒屋で小僧が入り用だというから、そこへ龍雄をやつてはどうだ。」

といいました。両親は、おじいさんの世話だから、安心してすぐにやることに決めました。

「龍雄や、今度はしんぼうしなければならんぞ。」

と父親はいいました。

龍雄は、父親に連れられて汽車に乗つて田舎にゆきました。そしてやがて父親だけが一人家へ帰つてきました。龍雄は田舎に残されたのであります。

それから三、四日たつて、やはり日暮れ方のことでした。

「龍雄さんが帰つてきましたよ。」

と、外に遊んでいた子供が家へ知らせにきました。両親は顔を見合せてびっくりし

た。そして外に出てみますと、まさしく龍雄でありました。

両親はわが子を家に入れてからさんざんにしかりました。そして、なんで帰ってきたか？ どうして遠いところを帰ってきたか？ と聞きました。

「俺は酒屋の小僧なんかになるのはいやだから家へ帰ってきた。銭がちつともないから鉄道線路を歩いてきたよ。」

と、泣きながら龍雄は答えました。

両親は、そのことをおじいさんに話しますと、おじいさんは笑って、

「これは四里や五里の近いところへやつたのではだめだ。百里も二百里も遠いところへやらなければだめだ。」

といました。

そのとき、ちようど都から、この村にきている質屋の主人が、

「そんなら、私どものところへ連れてゆきますが、奉公によこしてくださいませんか。」

といました。龍雄の両親は、幸いと思つて、その主人に龍雄を頼んで、都へやることにしたのであります。

龍雄はついに、その主人が都へ帰るときに、連れられて都にきました。彼はにぎやか

で、四辺がきれいなのに驚きました。しかし、それも初めのうちだけでした。彼は、また故郷が恋しくなりました。母や、父や、友だちや、遊んだ森や、野原が恋しくなりました。恋しくなると、彼の性質として矢も楯もたまらなくなりました。ある夜、店から抜け出した彼は、足の向くままに、停車場を指してやってきました。けれども、もとより汽車賃がなかったのです、どうすることもできません。見ますと、故郷の方へ立つ夜行列車が出ようとしています。

彼はせめて貨車の中にも身を隠すことができたなら、幸福だと考えましたので、人目をしのいで、貨車に乗り込もうとしますと、中から、思いがけなく、

「だれだ?」

と声がかしました。そして大男が龍雄をとらえました。龍雄はもう逃れる途はないと知りましたから、すべてのことを正直にうちあけました。その男は酔っていました。

「しよのない奴だ。俺だから許してやるのだぞ。そんなら乗せてやる。そのかわり俺は眠るから、汽車がどの停車場に着いても、止まったときはきつと俺を起こすんだぞ。さあ乗れ。」

と、男はいいました。龍雄はよくその約束を守りました。そして翌日の朝、汽車が故

郷きょうの停車場ていしやばに着ついたとき、男おとこに別わかれを告つげて、男おとこのおかげで無ぶ事に停車場ていしやばからも出でることができました。

彼はかれ両りょう親しんにしかられる覚かく悟ごをして家うちへ帰かえりますと、圃はたけに出でてなにかしていた母はは親おやは、龍たつ雄おの姿すがたを見みつけたとき、夢ゆめではないかとびつくりしました。そしてあきれました。ひとりひとり両りょう親しんがあきれたばかりでなく、しんせつなおじいさんも今こんど度は笑わらいませんでした。手てを組くんでじつと考かんえました。そして、しばらくしてから龍たつ雄おに向むかって、

「おまえは、なにになりたいいつもりなのだ。」

と、おじいさんは聞ききました。龍たつ雄おは、両りょう手てをひぎに置おいて考かんえていましたが、

「どうせ、故郷こきょうにすることができないなら、いつそのこと海うみへ行って船ふな乗りのりになりたいと思おもいます。」

と答こたえました。これを聞きくと、おじいさんは黙だまつてうなずきました。

「なるほど、おまえの気き質しつではそうでもあるか。いままで、私わたしどもが、なんにでもおまえをさせ得うるものかんがと考かんえていたのがまちがっていた。おまえの好すきな途みちを、おまえはゆくがいい。」

と、おじいさんはいいました。

青い青い海はどうどうと波高く響いています。見渡すとはてしもない。その後、海に
いって船乗りになった龍雄は、いま、どこを航海していることでしょう。もう、彼は、
故郷には帰ってこなかったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「日本少年」

1918（大正7）年7月

※表題は底本では、「海《うみ》へ」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海へ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>